

東北大学文学部着任挨拶（今井勉）

四月一日付けで西洋文化学講座（フランス文学）にまいりました。着任から一ヵ月が過ぎ、ようやく落ち着いてきました。新潟で生まれ育ち、京都と東京で暮らしてきた私にとって、仙台は初めての土地です。「目に青葉山ほととぎす初がつお」、この俳句がぴったりです。緑が多く、海も山も近く、食べ物も旨く、したがって酒も旨い、実に暮らしやすい、いい所で、家族共々たいへん喜んでおります。また、緑豊かな仙台の中でも特に自然環境に恵まれた東北大学文学部の立地の素晴らしさには驚くばかりです。

私は、フランスの詩人・思想家ポール・ヴァレリー（一八七一～一九四五）を研究しています。ヴァレリーは日本でも早くから紹介され、「フランス第三共和政を代表する知性の人」というようなレッテルも流布していますが、私の興味の対象は、栄光に満ちた公的なヴァレリーではなく、知的にも感情的にもモヤモヤした等身大のヴァレリー、とりわけ、その実像が今だに不透明な青年期のヴァレリーです。ヴァレリーの青年期に関する研究は世界的に見てもまだまだ手薄で、徹底的な解明の待たれている領域ですが、フランス国立図書館所蔵の膨大な草稿の整理が進み、完全活字版『カイエ』の出版も始まるに連れて、ようやく研究の機運が高まってきました。資料体の整備という客観的な流れの中に、私の研究も位置していますが、もっと主観的、個人的なレベルで、私の研究の転機となった経験に触れておきたいと思います。

それはパリのエコール・ノルマル留学中でのことです。それまではどちらかと言うとテキスト主義、つまり、決定稿テキストの分析の手際だけで勝負するような読解がすべてだと思い込んでいた私が、様々なテキストを読むヴァレリーの具体的な姿と実際にテキストを書くヴァレリーの具体的な姿とを追っていく内に、極めて基礎的な実証的研究の面白さに目覚めたということです。ヴァレリーが熱烈に読んだはずのラヴェッソン＝モリアン版『レオナルド・ダ・ヴィンチ手稿』全六巻の一頁一頁を、ノルマルの図書館の薄暗い片隅で、ばりばりと音を立てながら繰っていた時に、それまでに経験したことのない、ほとんど甘美と言ってもいいような感覚を味わいました。また、フランス国立図書館草稿部の奥の部屋に籠って、ヴァレリーのデビュー作『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の草稿のマイクロフィルムをすべて筆写し、許可を得てオリジナルの確認作業をした時には、百年前の人間のナマの息づかいのようなものに、一種の幻視の感覚を味わいました。パリの二つの図書館で味わったこの経験が、今の私の基本にあります。

したたり輝く緑が目の前に展けています。東北大学文学部のこの恵まれた環境の中で、テキストを読む私自身の経験を豊かにすべく努力すると同時に、テキストを読むことの喜びを学生の皆さんと共有すべく頑張っていきたい、と思います。よろしく申し上げます。

『東北大学文学部広報』第63号（平成9年5月1日、pp. 3-4.）